

小倉記念病院 循環器内科だより

つなぐ

Vol.21

2018.5月

2018年4月3日、経皮的僧帽弁クリップ術の第一症例が行われた。

これまで、僧帽弁閉鎖不全症治療の選択肢として、薬物治療と外科手術があった。しかし、薬物療法はあくまで対症療法、外科手術は左室機能低下、複数の併存疾患の方や高齢者にはリスクがあり、重症な僧帽弁閉鎖不全症の患者さんには有効な治療方法が他になかった。

しかし、経皮的僧帽弁クリップ術が登場したことにより、外科手術のリスクが高かった患者さんにも治療の選択肢が広がった。

これを九州初の治療へとつなげたのは、2015年、ドイツ留学から帰国した循環器内科の磯谷だ。彼は留学中、経皮的僧帽弁クリップ術のデータ解析を積み重ね、帰国後いつでもこの治療が始められるよう準備を進めていた。

帰国から3年。世界ではすでに数万例行われている経皮的僧帽弁クリップ術がようやく日本で開始された。第一症例を迎える直前の彼の言葉に、この治療を届けるために注いだ、努力と情熱が現れていた。

「ようやくこの日を迎えました。

ここからが、スタートですね！」

